



TITLE:

アフタリヨンの貨幣心理説に就いて

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

CITATION:

松岡, 孝兒. アフタリヨンの貨幣心理説に就いて. 經濟論叢 1937, 44(5): 148-163

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130946>

RIGHT:

神戶博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟叢論

第四十四卷 第五號

(通卷第二百六十三號。禁轉載)

奉
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

目次

滿洲移民の特異性と掃匪問題	法學博士 山本美越乃	一
農家の負債と負擔能力	法學博士 河田 嗣郎	一〇
現代社會學に於けるパレット社會學の地位	文學博士 米田庄太郎	三三
幕末の商稅論	經濟學博士 本庄榮治郎	三六
實際政策と政策原則	經濟學博士 作田 莊一	六六
『維新の詔』に於ける變革の國是	經濟學博士 石川 興二	七九
シュレーデルの王室金庫論	經濟學士 小山田 小七	九七
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて	經濟學士 中川與之助	一二三
工場内勞働者教育事業の目的	經濟學士 大塚 一朗	一五九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて	經濟學士 松岡 孝兒	一八四
明治初年の官營産業に就いて	經濟學士 堀江 保藏	二〇四
財政學の基本問題	經濟學士 大谷 政敬	二二五
取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて	經濟學士 今西庄次郎	二四二
貨幣の中立性に關する一考察	經濟學士 中 谷 實	二五八
リストの國民生産力說	經濟學士 白杉庄一郎	二七四
財政學と經濟政策論との交流	經濟學士 島 恭彦	二九〇

目次

二

生産の構造と貿易	經濟學士 松井 清	三六九
租税の農業に及ぼす影響	經濟學士 山岡 亮一	三八六
再保険と共同保険との接近	經濟學士 佐波 宣平	三〇三
耕地管理組合に就いて	經濟學博士 八木芳之助	三二五
熊澤蕃山研究序説	經濟學博士 黒 正 巖	三三六
水産經濟學と其の課題	經濟學博士 蟠川 虎三	三五二
輸入制限と國內物價との關係	經濟學博士 谷口 吉彦	三六三
昭和の税制改革	經濟學博士 汐見 三郎	三八五
自然利子論	文學博士 高田 保馬	四〇七
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて	商 學 士 武藤 長藏	四四四
現段階に於ける租税體系	經濟學博士 土方 成美	四七七
支那南北辨	法學博士 財部 靜治	四九七
赤字公債の消化	經濟學博士 小島昌太郎	五二三

アフタリヨンの貨幣心理説に就いて

松岡孝兒

一

貨幣心理説なるものの理論上の意義は、その一般價值説との關係に於いてとりあげられたことにあり、従つて貨幣心理説の理論的吟味は價值の根據と供給需要法則なるものへの吟味とを伴ふものであることは素より當然である。併し私がここでこの問題を取りあげた理由は、かかる理論的意義に於ける重要性よりも寧ろ其の實踐的意義に於ける重要性にある。蓋しこの學説の成立は最近の貨幣經驗に基く貨幣價值の直接下落なる事象と密接不可分の關係にあるからである。即ちこの學説はその出發點に於いて大戰後の貨幣價值の異常なる下落といふ社會的事實に其の根據を有つてゐるからである。

周知のごとく大戰後の對外貨幣價值現象即ち爲替現象は、從來の爲替理論例へば國際貿易差額説の行詰を暴露せるものであるが、併しまた新に主張されつつあつた購買力平價説を以つてしても尙充分にこの事實を説明することができなかつた。今日人口に膾炙してゐるアフタリヨンの爲替心理説は、實にかかる事情に於いて此等二つの學説を止揚せんとして現はれたものである。従つて彼の主張せる爲替心理説なるものに於いては、單に國際貿易差額説の示せる條件と購買力平價説の示せる條件のみを綜合せるに止らない。更に一層高次なる位相に於いて此等兩學説の含み得ない要素をも含んで新學説を打ちたてんとせるものである。尤もここではかかる爲替學説に

ついでこれ以上觸れない。

唯一言かかる二つの學說を止揚せざるを得なくなつて來た事情に就いては、少し觸れて置く必要がある。即ちアフタリヨンの貨幣心理說の實踐性は、大戰及び大戰後の貨幣價值問題の異常性の説明に應ぜんとせるものであるといふことである。

實際大戰後の新たなる經驗は例へばフランスのごとくそのフランの下落が極端ではないが併し相當深刻なものに於いては從來のやうな數量說的説明によつては到底貨幣價值の下落を説明することができなかった。況んやドイツのごとくそのマルクが極端に下落せる國に於いてはフランの場合を説明することができたと考へられてゐた貨幣所得說を以つてしてもまたはや説明を加へることができなかった。かかるマルク貨幣價值の變動のごときものをも説明する法則はどうしても從來のものに對してこれらのものをも含んだしかもより高次な位相にたつ法則を以つてしなければ其の妥當な見解を示すことはできない。かかる條件を充たすものこそは實にアフタリヨンによれば彼の貨幣心理說であり、更にその發展者としての爲替心理說である。

まづ其の數量說の見解の不成立の最大原因はその流通速度の通念の不成立に基く。實際數量說に於ける流通速度の増加は國內貨幣への信認の喪失に伴ふ國內貨幣よりの逃避に依る——それは即ちかかる國內貨幣の受領と共に之を手放さんとしてその商品買入を急ぐと共に其の買入分量をできるだけ多からしめることに基く——ものとされてゐる。併しかかる國內貨幣よりの逃避が假定せる事情が永續するときは、それによつて惹起される貨幣價值の下落はもはや流通速度の見解を以つてしては説明され得ない。例へばドイツのマルクの例をとるとすれば、そ

の下落が百分の一、乃至千分の一といふがごときときに於いてはともかく、更に深化して十億分の一、一兆分の一といふがごとき下落率に於いては流通速度の觀念はそれ自體考へられなくなる。かかる場合を説明するものは即ち貨幣心理説である。特に流通速度の變化のごときはその變化の過程には商品を含む限り一定時間を必要とするものであり、かかることは最近經驗せる一瞬間に於ける變化特に一日に於いて數回にも互る變化のごときは説明し得られないと謂はれるに於いて尙更貨幣心理説の重要性がとりあげられることとなる。このことは爲替理論に於いて特に著しい。アフタリヨンはこれをば次のやうに謂つてゐる。「爲替自體に關しては近年の貨幣史の示すところは其の迅速性に盡きるのであつて爲替は此の迅速性によつて極めて異れる經濟的又は政治的現象の反動を受け謂はゆる心理的要素と謂はれる全重要性を示すものである」¹⁾と。

このことはまた從來貨幣所得説に認めた妥當性をも再吟味せざるを得なくなつて來てゐる。蓋し貨幣價值の下落が一般化する當初は所得の仲介によつたことは勿論であるが、其後心理的見解特に豫測が次第に大なる影響を及ぼすに至つてそは先づ卸賣物價に強く働きかけるに至つた。このことが反覆され所得作用を通じて擴大されるに従ひ、豫測の影響は益々大となり遂に小賣物價にまでも及び、かくのごとき貨幣價值の下落への經驗はやがて一定の原因に對して常に心理的に一定の結果を生じ、所得の作用はそれだけ次第に其の存在を弱めることとなり、貨幣心理説の存在は益々その認識を深めざるを得ない事情を生ぜしめた。

之を要するにアフタリヨンによると、²⁾世界大戰後の貨幣價值下落現象は、一應貨幣價值の變動をして通貨より獨立させ、所得の作用に支配されるがごとき事情を生ぜしめたものではあるが、更に深刻な經驗例へばドイツ・マル

1) Aftalion: Monnaie prix, et change, 1935, p. 199.

2) Aftalion: op. cit. p. 200.

クの経験のごときは、貨幣価値の變動を完全に通貨から獨立させたのみでなく更に所得からも獨立させたものであることを語るものであると謂はれる。かかる考方こそは實に純粹心理的作用とも稱すべきものであつて、かかる見解によれば貨幣価値の即時的直接的下落現象は極めて妥當に説明され、その限り、數量說の見解並びに所得說の見解は清算されなければならない。所得說の見解のごとき一應妥當なものを認め得ないわけではないが、³⁾尚最近の複雑な貨幣價值變動現象を説明する見解としては充分であるとは決して云へないことになる。

二

以上述べた通りであるから、以下に於いては私はアフタリヨンの貨幣心理説をとりあげ、その新しい主張を基礎づける貨幣理論特に貨幣價值決定理論を説明したいと思ふ。

私は以下アフタリヨンの貨幣心理説の理論的方面を彼の言葉に於いて取扱はんとするものであるが、彼の學説は既に其の名稱によつて容易に推定されるやうに主觀學說の立場にたつてゐる。従つて個人にとつての商品價值は其の最終效用即ち其の使用し得る最終單位の効用に依存する。換言すれば其の使用し得る單位數の増加とともに遞減してゆく効用にその根據を有つものである。この點に就いて個人の價值決定に關しては謂はゆる量的要素と質的要素とが結合され、量的要素は單位の稀少性に關係し、質的要素は個人に對する最終單位の効用に關係することになる。尤もかかる主張に就いては次の二つの點が考慮されなければならないとされてゐる。⁴⁾

其の第一は量的要素は唯單に最終單位はどれであるかといふことを決定するためにだけ關係するものであるといふことである。その價值はこの最終單位の効用に依存することになる。従つて價值の究極の根據として認めら

3) 例へば Wieser の所得說のごとき、詳細は Aftalion: op. cit. pp. 202-208.

4) Aftalion: op. cit. pp. 235, 236.

れるものは效用である。價值の根據は此の意味に於いて本來心理的なものであると考へられる。

其の第二は貨幣價值なるものは、後に詳述するがごとく、貨幣單位が現に與へる満足よりも、むしろかかる單位に對し各人が期待する満足に依存するものであるといふことである。このことは一般に價值なるものは謂はゆる最終單位の效用といふがごときものに依存するよりも、むしろ最終單位に認められる效用即ち最終單位に期待される満足に依存するものであるといふ考方を妥當とし、或はまた高田博士の謂はゆる將來効用に該當するものである⁵⁾。此の意味に於いてそれは正確に其の價值を創造する財の與へるものではなく、反つて與へると思はれるものまたは獲得すると期待するものに依存するものである。かかることはあてにしてゐたものが外れることやまた間違つてゐたといふやうなことも別段矛盾するものではないとされる。蓋し若し將來その誤謬であることが明瞭となるときは、そのかぎり其の效用は認められないこととなるまでであると考へられるからである。

今商品價值即ち市場價值の成立が上述せるがごとき意味に於いて商品に對する個人的價值を決定するものであるとするならば、市場價值は謂はゆる供給需要曲線によつて決定されることとなる。従つて實際上供給と需要とはある價格に於ける供給需要としてのみ始めて意味を有つこととなる。即ち供給量または需要量たる量的要素と供給價格又は需要價格たる質的要素とが結合し、兩者は量的質的曲線とも云ひ得る供給需要曲線に於いて融合することになる。アフタリヨンはこれを説明して「各人は商品の遞減價格に於ける遞増量の需要者である、賣手は價格が増せば益々多くの分量を與へやうとする。價格は供給需要が均衡する點、同一價格に於ける供給需要間に等性が成立する點、供給需要曲線が相交はる點に決定される」と述べてゐる⁶⁾。

5) Aftalion : op. cit. p. 228.

6) 高田保馬：貨幣の將來効用について（經濟論叢第39卷第5號）參照

更にまた商品効用に基づく個人的價值は供給需要曲線の比較により商品の社會的價值に緊密に結合するものである。即ち社會に於ける總需要供給曲線は個人的需要供給曲線の綜合せるものである。かくて例へば需要される單位の價值は個人的需要曲線上に於ける最終單位の効用或はまた前述せるところに從ふとすれば最終單位の期待効用に依存するものである。唯今日の市場の實際による個人的供給需要曲線では商品は貨幣と共に考察される。

即ち商品の需要は一定價格に於けるその需要を意味するものであるから、そのことは需要される商品價值と供給される貨幣價值との比較に外ならない。商品需要に對する個人的曲線はまた貨幣供給に關する個人的曲線である。蓋し商品の供給曲線は貨幣の需要曲線に外ならないからである。いま若し甲乙の兩人が商品に對して相等しい満足を期待するとしても即ち商品に對する効用遞減の曲線が同一であるとしても、若し甲乙兩人にして貨幣單位に對する價值の評價が異つて居る場合には、此等兩人の市場に於ける供給需要曲線は異つて來ざるを得なくなる。即ち若し甲にして乙よりも一層大なる重要性を貨幣單位に認めるときに於いては、甲はそれだけ商品需要に關しては乙よりも劣位にたつに至るものである。そして甲をしてかく考へさせることの理由としては、或は甲の貧困、低所得、條件難、節約心等をあげることができやう。

これだけのことは凡そ最近の主觀說よりみるときは何等問題のないところであらう。このことを徹底的に貨幣單位に適用せるものが謂はゆる貨幣心理說である。そしてかかる考方こそはアフタリオンが最近の經驗を通じて彼が最も妥當と信じてゐるものであり、またかかる見解のかぎり、それは謂はゆる貨幣價值決定法則としての貨幣數量說を以つて不當であるとするは勿論、更には最近新に主張されてゐる貨幣所得說も亦充分な條件を充すもの

ではないとする。併しここにはこれらの點に論及する餘裕はない。唯私の謂はんとするところは、彼の貨幣心理説なるものが單なる貨幣心理説ではなくて、それはこれまでに貨幣價值決定法則として認められてゐる貨幣數量説及び貨幣所得説の吟味の上にたつものであることを主張せんとするにある。

三

かくのごとく、上來述べ來つた舊來の學說の清算は、然らば如何なる内容を齎すものであるか。アフタリヨンの謂はゆる貨幣心理説なるものはこれまで問題となり來つた貨幣價值決定の舊き革囊に如何なる新しい酒を盛らんとするものであるか。アフタリヨンはこの點を率直に次のやうに述べてゐる。即ち「貨幣に關する個人的評價は所得の最終貨幣單位が交換によつて與へる満足に依存するものではなくて、貨幣の仲介に依つて獲得せんとする満足即ち各人が其の所得の最終貨幣單位に期待する満足に依存するものである」⁸⁾と。

かかる説明に依つて理解されることは、貨幣單位の評價は貨幣の購買力即ち獲得される商品の期待効用に結合されてはゐるが、併し貨幣所得説の示すやうに貨幣の購買力及び效用自體には關係してゐないといふことである。即ち貨幣單位に關する個人的評價がその最終貨幣單位に期待する満足に依存するといふことは、そのこと自體に於いて貨幣評價に貨幣自體の質的要素を含むことを意味するものである。

然らばかかる貨幣の期待効用に於ける質的要素は如何なる根據を内容とするのか。是れ即ちアフタリヨンの貨幣心理説の最も特長ある點である。彼がこの點について擧げてゐるものは、第一には「交換に於ける要求の大小」⁹⁾であり、第二には「貯蓄心の強弱」¹⁰⁾であり、第三には「豫測」である。¹¹⁾尤もこれら三つのものは、その評價に於い

8) Aftalion: op. cit. p. 208.

9) Aftalion: op. cit. pp. 204, 210.

10) Aftalion: pp. 210, 213.

11) Aftalion: pp. 213, 219.

ては必ずしも皆同等の重要性を有つものではない。其の重點は從來述べ來つた點よりして想像されるやうに、最後の「豫測」に存する。このことは彼も亦明瞭に斷つてゐる。¹²⁾しかし問題をそこまで運ぶまでに先づ順序としてこれら三つの要素を簡単に説明する必要がある。

(a) 交換に於ける要求の大小——個人が交換に於いて性格的に有つ要求度の大小は貨幣心理説の内容を成す一要素である。即ち甲乙兩人が同一の所得と貯蓄とを有ち更に兩者とも其の所得を全部にせよまたは同一割合でせよ消費するものと假定すると、一方甲に於いては同一の貨幣單位より常に多くの満足を求めんとするに對して、他方乙に於いては極めて寛大に満足を求めやうとする。前者は其の貨幣單位の交換に於いて充分な満足を求めることができないときは或は交換から退きまた或は他の機會まで交換を見送るひとであるが、後者はかかる點は極めて寛大であつてかかる場合にも謂はゆる値切らずに買入れるひとであり、物價騰貴の責任者は常に消費者自體にあると論じさせるひとであり、更にはある店舖の商品價格を他の店舖の商品價格に對して引上げさせ彼なくんば恐らく自滅するよりほかに見透を有たない小賣業者の存在を繼續させるひとである。

(b) 貯蓄心の強弱——同一所得を獲得するひとといへども、貯蓄心の強弱に従ひその商品需要曲線従つては貨幣供給曲線は異なる。このことは節約者の所得が既に浪費者の所得よりも少いものであることを明かに示してゐる。このことをアフタリオンは次の言葉で語つてゐる。「節約者は浪費者よりも購買するものが少いので、一層少い所得を有つたのと同様である。節約が構成するかかる質的要素に於ける相違は、かくて所得が構成される量的要素の要求と同一の結果に達する。所得二〇、〇〇〇フラン中六、〇〇〇フランを貯蓄するものは、其の他の事

12) Aftalion: op. cit, pp. 221. 223.

情にして相等しければ、その貨幣單位をば彼が消費する一四、〇〇〇フランの全所得を有つものと同様に評價する。彼の貨幣單位に對する評價は、彼の第一四、〇〇〇番目の貨幣單位の所得に對して期待する満足に依るものであつて、第二〇、〇〇〇番目の消費に對して期待し得る一番低い満足に依るものではない¹³⁾と。

このことから考へられることは、貯蓄なるものは個人的貨幣評價が所得の最終單位に期待する満足に依存するものであるといふことである。即ち消費される第一四、〇〇〇番目の單位或は貯蓄される第六、〇〇〇番目の單位に關して期待される満足は、殆んど相等しくなるといふことである。即ち所得者は結局に於いて全所得を或は消費或は貯蓄に於いて處分するものであるが、一般には消費される最終單位は貯蓄される最終單位と殆んど相等しい期待満足が認められるとされる。即ち最終單位所得の限界満足は相等しくなるやうに處分されるものであると考へられてゐる。アフタリヨンはこのことをば、「其の二〇、〇〇〇フランの所得に對し一四、〇〇〇フランを消費し六、〇〇〇フランを節約するならば、是れ即ち彼が貯蓄される第六、〇〇〇番目の單位よりも消費される第一四、〇〇〇番目のフランの満足を好むといふことになり、また消費される第一四、〇〇〇番目の單位よりも貯蓄される第六、〇〇〇番目の單位を好むといふことになる。恐らく彼にとつては消費される第一四、〇〇〇番目の單位と貯蓄される第六、〇〇〇番目の單位とに期待されるものの間には殆んど相等しいものがあるやうに思はれる」と述べてゐる。¹⁴⁾

尙ほここに一言述べて置く必要があることは、貯蓄と謂はゆる期待満足との關係である。既に述べたやうにアフタリヨンの貨幣價值決定の考方は、現實にそれに依つて齎される満足によるものではなくて、期待される満足

13) Aftalion: op. cit. p. 211.

14) Aftalion: op. cit. p. 212.

に依るものであるといふことである。従つて彼の考方に依れば、貯蓄の場合にも當然にこの考方が認められることとなり、即ち個人は貯蓄に期待される現在及び將來の満足に依存する貨幣評價に基いて活動するものであることを深く注意しなければならない。従つてこの見地から前例を更に吟味するとすれば、物價高騰または高騰の見込あるときは、所得二〇、〇〇〇フランあるひとの貯蓄は、もはや前述したやうな六、〇〇〇フランではなくて、あるひは七、〇〇〇フランあるひは八、〇〇〇フランとなると考へなければならなくなる。

(c) 豫測——ここに謂ふ豫測なる要素は個人的評價に於いてもまた社會的評價に於いても、極めて重要な役割を果してゐるものである。従つて個人的評價に於いて將來貨幣價值の下落を豫想するときは、そのひとは將來に備へんとして益々多くの商品を購入し、他の條件にして相等しいときは、一層高い商品の需要曲線または貨幣の供給曲線を以つて市場に参加することになる。このことは社會的評價に於いても同様である。むしろ其の役割は個人的評價の場合よりも一層切實となる。従つて社會的に物價騰貴に對する期待が一般化するときは、其の作用は即時的に現はれ、社會的需要曲線は物價騰貴を顯著ならしめるに至るものである。

此の期待される貨幣價值の騰落は、間接財及び卸賣物價に於いて特に其の傾向が著しく示される。また商工業者はかかる豫測に基いて上述せる商品の轉賣される市場に對してあるひはまた直接財市場に對して間接財の需要曲線を変化させるものである。一般に直接財はあらゆる經濟活動の最後の目的であると謂ひ、また直接財はあらゆる間接財の價值を支配するものであるとは謂ふけれども、かかる豫測に基く騰落は普通には直接財物價及び小賣物價に關するものよりも間接財物價及び卸賣物價に於いて一層強く且つ早く現はれるものであると謂はれてゐる。

る⁵¹⁾

併しながらこの點について一層注意しなければならないことは、爲替またはインフレーションに關係して惹き起される貨幣價值自體の騰落である。蓋し一般的には貨幣單位の價值は常に同一であると考へられ易く、従つて變動するものは商品側の事情に依るものであると考へられ易いからである。このことは一應考慮されなければならない。従つて豫測は先づ間接財物價、卸賣物價に作用する。間接財特に原料品市場はこの點は鋭敏である。或はかかる點から更に問題を分析して特定商品の騰落が一般貨幣價值の變動に及ぶものであると説くものもあるが、要するにかかる經驗が反覆され繰返されるときは、豫測は次第に貨幣價值自體にも加へられるに至り、かかる限り、其の影響は單に間接財物價または卸賣物價のみでなく、更に直接財物價、小賣物價にも波及することとなりここに豫測的役割の極めて重大なるものであることを示すに至るものである。爲替またはインフレーションの及ぼす貨幣價值騰落作用は、以上述べたやうに、勿論最初から一般的に且つ即時的に惹き起されるものではない。唯しかし豫測の反覆は次第にこの問題の時間的制約を克服し打破せんとするの傾向を強調してゐることはこれまた疑ないところである。

四

以上述べ來つたところを綜合するときは、結局アフタリヨンが貨幣價值の決定に對してかくのごとく質的要素を重要視してゐることは、貨幣價值決定上に謂はゆる論理的嚴密性を與へるかのやうに思はれてゐる。

併しながら上述せる三つの質的要素は、彼の考方に於いては必ずしも同一の重要度を有つものではない。この

ことについては既に若干觸れたところであるが、彼の意見によれば、三つの要素中最初の二つ即ち要求の大小及び貯蓄心の強弱は謂はゆる物價、水準の決定には重要性を有つものではあるけれども、謂ふところの物價變動自体には重要性を示すものではない。¹⁶⁾ 最初の二つの要素のごとき個人の性質に關するものは、一年毎には勿論一時代毎に見ても比較的には變化は少い。蓋し交換力又は貯蓄心のやうな心理的なものについて社會的に分析を試みても、大凡全體的には著しい變化は認められないのではないかと考へられる點が多いからである。アフタリオンはこの事實をば「釣鐘型の對稱的曲線となるであらう」と述べてゐる。¹⁷⁾ 即ち曲線の中央となるほど平均をめぐる多くの人達が數へられるが、その兩端に於いては極めて僅かな人達しか數へられないといふ事實を語るものではなからうか。

要するに上述せる最初の二要素は、其の影響力も弱く且又其の把握も困難なやうである。是れ即ち從來所得説のごとき上述せる二要素を含まない學説がともかくも認められたり、また少くも物價については貨幣的要素の代りに所得要素をとりあげても何等實踐上に不都合はないと考へられるに至つた所以であらう。併しながら完全な理論の在方からすれば、かかる考方の不完全なものであることは否み得ない。此の意味に於いて完全な理論はたとひ物價變動には作用しないとは云つても、少くも説明さるべき事象に關してはあらゆる要素を含まなければならぬと考へられる。

然るに第三の最後の豫測なる質的要素は、前二者とは其の存在を異にし、少くも一定時期に於いては物價變動に頗る顯著な影響を及ぼしてゐる。このことは物價の騰貴または下落が長期的にしかも大きな幅で示されたやう

16) Aftalion: op. cit. p. 221.

17) Aftalion: op. cit. p. 222.

なとき、或は爲替の異常な變動が示されたやうなときには、極めて明瞭に其の影響を及ぼし現在の貨幣價值への個人的評價即ち貨幣に對する期待的評價は直ちに貨幣價值騰落の指標となるに至る。従つて所得額に於ける増加もなく、通貨量の變化もないのに、豫測の作用のみで貨幣價值は騰落するに至るものであつて、是れ即ちアフタリヨンが「其の下落は心理的要素の作用に於いて直接的に行はれる」¹⁸⁾と述べてゐる所以のものである。

このことは實に貨幣價值の評價が將來の購買力に依存してゐること、換言すれば將來の貨幣單位に對する豫測に依存してゐることを語るものである。かくのごとき見方に於けるかぎり、豫側の變化はあるひは所得とかあるひは前日の物價とかには何等の關係もなく、むしろ貨幣に關する個人的評價従つてはその社會的評價の著しい變化と關係するに至るものである。

一般に價格の連續性といふ點から考へると、今日の價格は前日の價格に依存し、同様の意味で明日の價格はまた今日の價格に依存するわけである。アフタリヨンに於いても決してこのことを否定してゐるものではない。唯彼の考方によれば、かかる價格の連續性は、將來に於ける個人的評價即ち質的第三要素たる豫測によつて著しく歪められることになるのである。¹⁹⁾價格の連續性をば豫測を通して見てゐる點に其の特性がある。このことを彼は次のやうに説明してゐる。²⁰⁾

「貨幣價值は今日ではもはや貨幣が含んでゐる物質の直接效用から來てゐるものではなく、各人が其の獲得に於いて期待する満足に依存してゐる。かかる評價に數へられるものは、貨幣單位の前日の購買力のみでなく、更に翌日に對して豫想される購買力の各人に依る評價である。そしてこれに附言すべきことはかかる評價は個人的評

18) Aftalion: op. cit. p. 223.

19) Aftalion: op. cit. p. 221.

20) Aftalion: op. cit. p. 219.

價を完全に決定するものではなくて、貨幣單位の今日の價値の個人的評價に於ける要素として現はれるものであるといふことである。そこには貨幣單位が前日有つてゐた購買力の評價もあるし、また貨幣單位が翌日有つてあらう購買力の評價もある」と述べた後、更に轉じて「併し尙ほそこにはこれまでの評價の單なる結果ではない今日ののための購買力の評價なるものがある。人間は時により、熱心になることもあり得るし、より、巧妙になることもあり得るし、より、節約的になることもあり得るし、より、先見的になることもあり得るものである。過去及び將來は現在に作用するものではあるが、人間に對して全然法則を作るものではない。従つて供給需要に關する個人的曲線を支配し今日の市場に成立してゐる物價を支配するものは、貨幣單位の價値に關し前日の物價とかなり獨立してゐる個人的評價である」と論じてゐる。

要するに彼の考方によれば、貨幣價値決定上質的要素は量的要素に比して遙かに大なる複雑性を示してゐる。そして此の質的な要素への考慮が即ち交換力の大小、貯蓄心の強弱、豫測の組合せ方の内容が量的要素に對する評價と結合して個人的評價従つては社會的評價を構成するに至る。併しかかる評價中若し商品に對する貨幣價値の變化を抽象し、商品に關する分量と欲求とを不變ならしめ、専ら純粹貨幣的變動要素を考察するとすれば、貨幣の個人的價値従つては社會的價値の變動に於ける主要要素は、一つは所得量の變化でありも一つは貨幣の將來價値の豫測である。更にまたこれら二要素について立入つて述べるならば、最近に至るまではこれら二要素中重要な役割を果したものは所得要素である。然るに最近に於いては重要度は次第に第二要素たる豫測に認められつつあり、この關心なくしては最近に於ける貨幣價値の變動については充分な見解を示すことはできない。

今所得變動については暫くこれを措く。豫測變動の要素として専ら考へられるものは何であらうか。アフタリヨンはこれに對して通貨の發行と爲替の變動とあげてゐる。²¹⁾唯この場合注意しなければならないことは、かかる通貨の發行及び爲替の變動は所得を通じ豫測を通じて作用するものであつて、機械的且つ自働的に作用しないといふことである。このことに二つの型があることは已に若干のべた。即ち一は爲替が物價に對して排他的でなく主として所得を通じて作用するものであり、も一つは爲替が殆んど豫測作用のみによつて作用するもの即ちこれである。

勿論かく貨幣の心理的要素を重要視するとはいふが、それは必ずしも通貨發行の影響又は爲替の影響と競合せる通貨發行の影響を否定せんとするものではない。貨幣心理説といへども通貨發行の物價への影響を認めないものではない。唯その影響が貨幣數量説のそれと同一でないことはまた斷るまでもあるまい。

今日に於いては爲替に對する市場の敏感性は極めて鋭敏であり、従つて敏感的作用は物價に先立つて爲替に現はれる。尤も對外關係が相當に制限され、爲替變動が國民によつて知られてゐない場合、例へばロシヤのごときは多少の例外をなすものであるが、少くも外國との關係がある重要性を有つ國では通貨の影響は爲替を通じて物質に作用するものである。唯その作用がある場合には所得によるものであり、またある場合には豫測によるものである。

五

以上述べ來つたやうにアフタリヨンの貨幣心理説は、大戰及其後に於ける貨幣學説と實踐との摩擦をとり

21) Aftalion: op. cit. p. 216.

ぞくため考察されたものである。従つてその考方は謂はゆる不換紙幣の流通を原則的事實として認めて考へられたものである。そこに信認への極めて重要な反省が向けられてゐることは深く注意しなければならない。蓋し貨幣學說上心理的要素の重視は信用方面に於いて最も高く評價されるからである。

アフタリオンが彼の貨幣心理説を主張するに際し、上述せるがごとくその心理的要素を強調せることも、結局は彼の考方が不換紙幣を根本的事實に於いて見てゐるからであつて、かかる事情は彼の貨幣心理説を研究する上に深甚な考慮を要するものである。惟ふにかかる考方は今日の經濟をば信用中心即ち信用過重の思想に於いて見るものであり、その限り、今日の經濟を貨幣經濟と觀じこの貨幣經濟を繞つて信用經濟が存在するものであると見るものと異なるからである。

勿論私と云へども今日の經濟に於ける信用の重大性を無視するものではない。併し今日の社會を資本主義制社會と觀じその根本に於いて利潤追及なるものが原則的に認められ、そこに標準價値物體なるものがあるひは顯在的にあるひは潜在的にあるとするかぎり、かかる社會に於いては依然一定金分量なるものの標準價値的存在が考へられざるを得ず、この意味に於いて信用重視によりすべてを支配しすべてを説明すると考へる考方は實は極めて表面的現象的な考方以外の何ものでもないことを語るものであつて、本質的にはどこまでもかかる信用の中心にあり信用の背後にあつて之を支配し決定するものへの關心を忘れてはいけなない。換言すればかかる心理的要素の作用を規定する根本的客觀的事實への輕視を深く反省しなければならないものと考へる。